

地域の底力——村上市

新潟県村上市

# 市民による 市民のための町おこしが根付く 城下町・村上の町屋を訪ねて

日本海に面し、清流三面川みおもてがわが町の中を流れ、  
背後には美しい山々がそびえる新潟県村上市。

江戸時代の歴史を受け継ぐ商店街には、  
木造の町屋が連なり、観光客の人気を集めている。

しかし一五年前までここは、

城下町の旧町人町のメイン通りをかきかぎ、

街を再開発する近代化推進の波にのまれようとしていた。

それを押しとどめ、自立した精神を持って

町おこしを進めた人々を訪ねた。



今あるもの大切さに  
気付くことから始まった  
町おこし

東京駅から新潟駅まで上越新幹線、その後羽越本線の特急に乗り換え、最短二時間半ほどで村上市に着く。越後村上藩の歴史を受け継ぐ城下町。この静かな町が、「町おこし」の好例として、全国から注目を集めている。中心となったのは商店街である。江戸時代から続く村上市の古い商店街には、木造の町屋が並び、そのうちの何軒かの店が昔ながらの店構えと看板で観光客の人気を集めているという。現地に足を運んでみると、菓子店、お茶を商う店（村上は茶生産地の北限としても有名）、民具

を扱う店、村上名産の鮭加工品の店と、さまざまな商店が伝統的な建築を活かして町に彩りを添え、観光客を呼び込んでいた。

町屋の造りは間口の狭さに比べ、驚くほど奥行があつて、土間を靴のままでも通り抜けられる構造となつている。江戸時代は間口の広さでかけられる税金が決まることであつたため、できるだけ間口を狭く、中を広く使う工夫をしたのではないか。

そうした商店のひとつ「富士美園」に立ち寄ると、居合わせたご主人が手ずからお茶をいれてもてなしてくれた。長いこと使われてきた道具類がゆかしい。「富士美園」でも、店から奥に入つてすぐの座敷は吹き抜けとなつており、二階に続く階段は「箱階段」として収納に活かされている。立派な神棚があり、長押（注1）にはご先祖の写真がかかつていた。土地を有効に使うため隣家とすき間なく建っている。それでも中庭を作り、天窓や明かり取りの窓を高くとるなどして、冬場でも光が入ってくる。古い日本建築を見ることが、昔の人の知恵を見せてもらう



富士美園で手ずからお茶をいれて観光客をもてなす主人の飯島久さん。店舗兼自宅の町屋の見学もさせてもらえる。

ことでもある。

このように整えられた町屋を見ていると、ほんの一五年ほど前までこの町屋が注目もされず、トタンで囲われていた家も多かったというのが不思議に思える。だが、現実はその通りだった。古い町屋はあまり価値のあるものと思われていなかったのである。近代化を進め、前の道路を拡幅し、車もつと通りやすいようにしたい、町屋を壊して建て替えたいと考える人々の方が多数派だった。そしてその考え方は日本全国で主流を占めていた。

村上市の流れを押しとどめたのは、偶然の出会いから生まれた村上らしさの再発見だった。その原動力となったのは鮭加工・販売業

を営む「甚つ川」の吉川真嗣氏である。大学卒業後、県外で働いていた吉川氏は、家業の「甚つ川」を継ぐため村上に戻り、その後、共に町づくりに取り組むことになった。美貴さんと結婚。次男であるが、兄が後を継がないと言いつつ、悩んだ末、決意し戻ってきたのだという。高校のときは早く村上を出たい気持ちでいっぱいだった。吉川氏は保守的な郷里が好きではなかったのだ。地方の町に暮らす者には珍しくない話である。

吉川氏も東京の大学に入り、広い世界を楽しんでいた。だが思いがけず実家の後継ぎとなることになり、家業の道に入ってしまった。最初のうちは商店会の集まりに出ても、隅の方で静かにしていたと



注1 日本建築において、柱を水平方向につなぐ部材。



村上市の町おこしに奔走してきた「崑っ川」専務の吉川真嗣さんと妻の美貴さん。



城下町・村上には武士の町、商人の町のほかに寺町がある。名刹・安善寺の見事な山門。

いう。その中で道路の拡幅の話が出ていることは聞いていたし、そんなものかとも思っていた。

「あるとき、東京の百貨店に『村上』の名が入ったのれんを掲げて鯉の販売会をやっていたら、それを見て声をかけてくださった方がいました。福島県会津若松市の老舗菓子店の社長・五十嵐大祐さんでした。会話の中で『村上市は今、近代化で町が沸きかえっているんですよ』と話したところ、五十嵐さんは『そんなことをしたら大変なことになる。おまえ、村上のいいところを知っているのか?』と言われたんです」

五十嵐氏は村上のいいところを次々にあげていった。特に大切なのは、村上が城下町としての特徴をすべて、現代に伝えているという点だった。村上城のあった「お

城山」の石垣、それを囲む武家の地区、町人の地区、寺町。しかも武家屋敷が十数棟、町屋に至っては三百数十棟も残っているのである。村上のように城下町としての大きな四つの要素が残っている町は全国的にも珍しいと五十嵐氏に言われ、更に五十嵐氏は吉川氏に「近代化をしては村上は取り返しのつかないことになる。あなたが近代化を止めなさい」と言った。

「当時は商店街の九六%もの人が近代化推進を望んでいるというデータが出ていました。市役所が近代化を提唱し、商工会議所も支持している。その中で反対意見を出すことには抵抗はありません。でも今言わなければ、取り返しのつかないことになってしまう。悩みました」

結局、吉川氏は独断で近代化反



上/町屋だけでなく武家屋敷の修復や保存も熱心に行われている。下/城郭は失われたものの、今も「城山」として親しまれている城址。毎朝歩いて登る人もいる。

対の署名活動を始める。だが、小さなコミュニティの中のこと、ひそかにまわしたはずの署名簿の存在はすぐに周囲に知れてしまった。吉川氏は関係者のコンセンサスを否定し、地域の和を乱すとして厳しく叱責され、署名活動は頓挫した。

### 古い町屋に光を当て、その良さを再評価してもらおう

しかし、その時吉川氏は進むべき方向を変えた。「道路を広げて成功している町はないが、歴史を活かして成功している町は各地にある」という五十嵐氏の言葉を思い出したからだ。反対という否定

的なやり方ではなく、古いこの町に価値があるのであれば、その価値を生かして元気を失っている村上を元気にしてみせよう。もしそれができれば、町の人の意識が変わり、近代化も見直される日が来ると思ったのである。

ある旅人の姿がヒントになった。「崑っ川」の店頭には千尾もの鯉が吊るされている。実際、「崑っ川」の内部に入ると、思わず声を上げそうになった。鯉が天井からぶら下げられ、町屋の土間を通り抜ける風で旨みを増している。家の内部には、昔から使われてきた井戸もある(今も現役)。開け放たれた座敷には仏壇や神棚があり、古い人形が飾られていた。建具一つとっても、職人の技術が



左／町屋の並ぶ商店街のそぞろ歩きを楽しむ観光客。右／「城下町村上絵図」吉川氏手作りのこのマップから町おこしが展開していった。



感じられ、とても美しい。「鮭を見て喜んでくれたある旅の人が、明治時代の古い町屋の空間（茶の間）を見て感動し、素晴らしいといつてその上り框（あが かま まち）に座り込んでしまったのです。私は驚きました。なんでこんな古いところがいいんだろう？でもはっと気づいたんです。自分が東京生まれで、この家にほんと連れて来られたらきっと喜ぶだろうと」

この時はじめて村上の魅力に吉川氏は気付いた。そしてたどり着いたのが、生活空間である町屋の公開だった。ここでも、「自分の店だけでなく、まわりの店も盛り立てる気持ちで町づくりでは大切だ」という五十嵐氏の言葉が支えとなった。吉川氏はその言葉を忠実に守り、「蛭川」のチラシを作る時もマップをつくって他の店の紹介を載せた。一軒ずつ訪ねて行き、無料でイラスト入りの店の紹介を掲載する代わりに、観光客が訪ねてきたら町屋の内部を案内してほしいと頼んだ。それを続けるうちに、「古い町屋で商いをする老舗が生活空間を公開する」という集団が形成

上／「町屋の人形さま巡り」で飾られた見事な段飾りの雛人形。風格ある町屋の座敷と調和する。下右左／各家庭で飾る人形にはそれぞれ工夫が凝らされており、見る者を飽きさせない。外国の人形を飾る家もあるという。



注2 主に玄関の上がり口で履物を置く土間の部分と廊下や、玄関ホール等の床との段差部に水平に渡した横木。

されていった。それが、今も吉川氏が会長を務める「村上町屋商人会」（平成十年七月設立）へとつながった。

### 「町屋の人形さま巡り」が全国の話題に

「でも、それだけでは弱い。次に考えたのが、『町屋の人形さま巡り』という企画でした」

古い商家にはたいいてい蔵があった、雛人形や五月人形など、古い人形がたくさんしまわれていた。それを期間限定で町屋に飾り、たくさんの人々を集めようというアイデアである。初めての「町屋の

人形さま巡り」は平成十二年三月に行われた。期間は三月一日から四月三日までの長丁場だったが、初期にやってきた人たちが口コミで広がり、後半にはさらにたくさんのお客が村上にやってきた。彼らを喜ばせたのは古い町屋と人形だけではない。各家のお年寄りたちがお国言葉で話す家や人形の来歴であり、普段着のもてなしだった。

吉川氏夫妻はあちこちのメディアにも売り込んだが、なかでも効果があったのはNHKの「新日曜美術館」である。美貴さんの発案で担当ディレクターに会いに行き、一〇分ほどの枠で紹介しても



上／「吉川酒舗」の座敷に飾られた六曲一双の屏風。村上の名勝「笹川流れ」を詠んだ頼支峰（頼山陽の子）の堂々たる書。下／花鳥画の描かれた六曲二双の屏風の前には長火鉢が置かれ、江戸の霏田気を醸し出す。



らうことができた。早くも放送翌日には全国から観光客がやってきて、村상을褒め称えて帰った。それがまた、町の人々の気持ちを高揚させた。

「町屋の人形さま巡り」は大いに話題を呼んだ。だが、その後も商店会内部の不協和音は絶えなかった。吉川氏が中心となって立案した企画に批判的な人々も多かったのである。しかし吉川氏は信念を曲げずに、少しずつ次の歩みを進めていった。

アイデアマンである吉川氏は次の一手を考える。村上には屏風の伝統のある町だ。屏風を持つている家は市内にたくさんある。人形さまと同じく蔵に眠っているはずの、古い屏風を座敷に出して、観光客に見てもらってはどうかろう？ 期間は秋に決めた。春は人

形さま、秋は屏風。年に二回の盛り上がりを作ることで、もっと村上が元気になる。目論見は成功し、平成十三年の九月に第一回を開催した「町屋の屏風まつり」にもたくさんさんの観光客がやってくるようになった。経済効果は近くの瀬波温泉にも広がり、村上を観光した後は温泉につかり、地元の御馳走を食べるといふ楽しみも広がるようになった。

こういう活動を吉川氏は手弁当で続けてきた。五十嵐氏に出会った一年後には、店の外観も改装した。今では古い木造の外観に大きなれんが似合う「岳つ川」だが、平成十一年に改装して店構えを一変させると、来店する客が一〇倍以上にも増えたという。数人ではあるが従業員も増やした。立派な雇用創出である。そのような見えて、改装を考える店も増えてきた。

吉川氏の言葉が説得力を持つには、やはり集客と売り上げアップがもっとも効果的である。景観を損ねているブロック塀を昔ながらの黒塀に似せた塀に作り変えようという「黒塀プロジェクト」もスタートさせた。資金は塀の板一枚を一口千円の寄付で賄っている。

市民の自立した動きなのだ。

### 挑戦を支える 町の大御所がいた

吉川氏らが進めるプロジェクトの特徴は、この「自立」にある。平成十六年には「町屋の外観再生プロジェクト」を立ち上げた。基金を作ったのは市民だが、お金を

基金に出すのは全国の会員たち。第一号は和菓子店の「早撰堂」に拠出した。一軒当たりの補助金は八〇万円、外観の改装に対してだけだが、たいていの家は自分たちの資金も出して内部もきれいにする。それによって建設業ははじめ、町の経済がまわっていく。もちろん客も増えた。

「外観を再生した店は商売繁盛



真っ先に町屋を修復した和菓子店「早撰堂」。右／2階と吹き抜けになっている高い天井。梁の美しさが印象的だ。左下／間口は狭いが奥行きがあるのが村上の町屋の特徴で、長い土間は通り抜けができる構造となっている。





上／昭和の中期以降ブロック塀になっていた小路は、「黒塀一枚1000円運動」として寄付を募り、ブロック塀のまま上に板をはり、市民の手で黒く塗られた。それだけで景観は一変した。下／吉川氏の私邸のまわりも、趣のある黒塀に囲まれている。



村上商工会議所の佐藤久也会頭。町おこしに頑張る若手をバックアップしながら、市全体の振興にも目を配る役割を担っている。



に繋がっていただけでなく、家の人が嬉しそうな顔で商売をしています。それを見られるのが何よりです」  
と吉川氏は言う。再生されたのは人の心だったかもしれない。

「黒塀プロジェクト」にも賛同者が増えてきた。さらに黒塀通りにもっと緑を増やそうという「緑三倍計画」やさまざまなイベントも動き出している。  
この町が素晴らしいのは、これらが行政主導ではなく民間の資金を集める形で進んでいるところである。吉川氏は、  
「自分が活動する上では、長老格の人がいろいろと支えてくださっています」  
と話す。その一人が、村上商工会議所会頭の佐藤久也氏である。佐藤氏は瀬波温泉の老舗旅館「大観荘」社長も務める。瀬波温泉は「人形さま巡り」がスタートする前から、村上市の商店街と協力し合って、市内への観光客誘致に力を入れてきた。市内の商店街を歩き、泊まりは瀬波温泉へ、と呼びかけも行った。

「吉川君はとても頑張っています。簡単には妥協しないぞ」という彼の進め方には賛否両論があるわけです。そこで商工会議所のような中立な立場からのバックアップが必要になってきます。  
たとえば、二〇〇九年の『国際景観会議』を村上でやらないかという話が来た時、吉川君に聞くと『やりたいです』という。私も村上の名を世界に広めるいい機会だと思っ、まとめ役を引き受けました。その時は商工会議所が事務局となり、地元の関係者が一丸となって会議を無事成功させることができました」



変革をするには突破力のある吉川氏のような人材は貴重である。

右上／町屋の由緒を紹介する案内板も、統一感を出すため木で作られている。右下／町を歩けばそこに、職人の手技の素晴らしさも見るができる。左／建物を修復すればそれで終わりではない。ブロック塀を黒塀にしたほか、新たに寄付を募って庭木を植え、緑を増やそうとしている。





村上市長大滝平正氏。「町屋プロジェクトでの成功を参考に、今後は点から線へ、線から面へ、全市内に展開していく」と観光振興の目標を語る。

### 町おこしの成功は 人材育成から始まる

だが、より大きな変革につなげていくためにはまわりの支えが不可欠だった。地元経済界の中心人物である佐藤会頭をはじめとする商工会議所のメンバーがバックアップしたことで、吉川氏の活動はやりやすくなったという。

全国から観光客を集めるようになった村上市では、行政も町おこしのバックアップを行っている。大滝平正市長は現在二期目。商店街で起こった動きを市内全域に広げようとしている。

「今はまだひとつの点。それを

線でつないで大きな面を作っていくことによって、地域の活性化や経済効果の向上を進めることが課題です。おとしから『協働のまちづくり』という制度をスタートさせて、市民税の1%をそこに充てています。地域の皆さんと話し合いながら、地域の宝を内外にPRしていこうという動きで、広域合併で広がった地域にも行政の職員を配置し、それぞれが自分たちの地域に誇りと愛情を持っていた

だこうとしています。また、伝統的建造物の保存地域の指定を受けるとか、祭りの文化財指定を受けるとか、行政がやるべきことがたくさんあります。文化庁との連携や申請などすべて関わっていかなければなりませんから」

町おこしを成功させるカギは人材にあると、大滝市長は考えている。まず、住民自身が自分たちの地域を理解し、協力体制を創り上げていくこと。今は「町屋の人形さま巡り」や「町屋の屏風まつり」で人々が集まっているが、その人たちをリーダーにするためにもステップアップが大切である。吉川氏だけでなく、たくさんの改革

者が市のあちこちに生まれ、力を合わせていけば、村上市の魅力はより広域的なものになっていくだろう。

町屋が再生され、観光客が集まるようになる、古い家に暮らす人々だけでなく、子どもたちにも歴史を大切にし、町を理解しようとする動きが生まれた。学校での総合学習に取り入れられ、今では「町屋の人形さま巡り」などイベントが開催されるたびに小中学生が観光客の案内をするなど、意識が高まっている。その積み重ねが、未来の村上を作る力になっていく。

商店街が盛り上がることで、瀬波温泉にも前向きな動きが生まれていると語るのは、佐藤商工会議所会頭である。

「町屋の『人形さま』に負けずに頑張らないといけない、という思いが瀬波温泉にはあるんです。私は観光協会の仕事で外国に行くのと、旧市街と新しい町がうまく分かれている姿をいいなと思って眺めていました。泊まるところは便利で新しい地区だけれど、散策は歴史のある旧市街へ行く。村上で

もそんな楽しみ方をしてもらえれば嬉しいですね」

吉川氏は近代化を押しとどめるために苦しんだ時期を振り返って言う。

「あれがなかったら、町のことに気づかずに、少しずつ町が蝕まれていって、気づいたら価値のない場所になっていたかもしれない。いつかまた来る逆風に備えて、今頑張らないと」

村上の改革は、今も進行中なのである。

村上市内を巡ったあとは車で15分の瀬波温泉でくつろぐ観光客が多い。雄大な日本海に沈む夕日の美しさは格別だ。手前は源泉をくみ上げる槽。

